甲府市文化財調査報告 28

大坪遺跡

— 崇教真光山梨中修験道場建設に伴う発掘調査報告書 —

2004

甲府市教育委員会
崇　教　真　光

序

甲府盆地はその昔湖であったから、人が住んでいなかったのではないかというまことしやかな風説を耳にすることがあります。ところが、近年の発掘調査によって上石田や善光寺等甲府の市街地から縄文土器や竪穴住居跡が出土し、5000年以上も昔から人が暮らしていたことが明らかにされつつあります。

また、最近の研究から、古代甲斐の国は東山道と東海道をつなぐ交通の重要な結節点だったことが指摘されております。そのなかでも、甲府市東部地域にある酒折宮は、『古事記』『日本書紀』のヤマトタケル東征伝説に登場し、特に重要視されていたことが推察されます。この甲府市東部地域は古墳時代から平安時代にかけての遺跡が密集し、なかでも大坪遺跡周辺では土器や瓦を生産していたことが解明されつつあり、今回の発掘調査の成果は貴重な記録としてここに公表する運びとなりました。

なお、本書の刊行に際しまして、事業主体の崇教真光の関係各位、発掘調査や整理作業に携わった方々から多大なご指導とご協力をいただきました。ここに感謝と御礼を申し上げます。

2004年12月

甲府市教育委員会

教育長　角　田　智　重

例　　言

1．本書は山梨県甲府市桜井町600-1に所在する大坪遺跡の発掘調査の報告書である。

2．調査は崇教真光の委託を受け、甲府市教育委員会が実施した。

3．発掘調査は、平成16年（2004）６月14日～６月18日まで、発掘調査終了後の整理・報告書作成については、８月１日～11月30日まで実施した。

4．本書の執筆・編集は甲府市教育委員会の平塚洋一が担当した。

5．本書の挿図・図版の作成は栗田かず子・鈴木由香が担当した。

6．本書に掲載した写真は平塚洋一が撮影した。

7．本書に係る出土遺物及び記録図面・写真等は、甲府市教育委員会で保管している。

8．本調査および報告書作成に係る組織は下記のとおりである。

調査主体　甲府市教育委員会

教育長　角田智重
部　長　中澤正治
次　長　向山公文
課　長　中込　功
係　長　信藤祐仁
係　長　寺本義雄
担　当　平塚洋一

（発掘調査従事者）

雨宮　英郎、池谷富士子、小池　孝男、坂本しのぶ、長澤　晴雄、中村　孝一

（順不同、敬称略）

凡　　例

1．全体図・遺構図・遺物実測図の縮尺は各図中に示したとおりである。

2．本書中の方位は磁北を示し、水糸レベルは、海抜高度を示した。

3．土層や出土遺物の色調表現については、『標準土色帳（2002年版）』（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。

4．図版中、土器断面が白抜きのものは土師器・瓦、黒塗りのものは須恵器、アミカケのものは陶器を表す。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査方法……1

第２章　地理的環境と歴史的環境
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1
　第３節　大坪遺跡の調査・研究史……4

第３章　発見された遺構と遺物
　第１節　層序……5
　第２節　遺構と遺物……5

第４章　まとめ……9～10

挿図目次

図１　調査区位置図……2
図２　周辺の調査状況……3
図３　調査区西壁セクション図……5
図４　調査区全体図……6～8
図５　試掘調査出土遺物①……11
図６　試掘調査出土遺物②……12
図７　試掘調査出土遺物③……13
図８　本調査出土遺物……16

表目次

表１　試掘調査出土遺物観察表①……14
表２　試掘調査出土遺物観察表②……15
表３　本調査出土遺物観察表……16

写真図版目次

１　調査区全景（モザイク）……6～8
２　航空写真……17
３　試掘調査出土遺物①……18
４　試掘調査出土遺物②……19～20
５　本調査出土遺物……20

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

調査地点は、平成４年（1992）に甲府市教育委員会で作成した『甲府市遺跡地図』のうち、周知の埋蔵文化財包蔵地である大坪遺跡に含まれる。平成７年３月開発が計画され、国・県の補助を受け甲府市教育委員会が埋蔵文化財の内容・規模を確認するため試掘調査を実施した。調査の結果、古墳時代から古代にかけての遺構・遺物が確認され、地下に包蔵されている埋蔵文化財に影響を及ぼすような開発を行う場合には事前の本発掘調査が必要だと判断されることとなった。その結果、調査に多額の経費が必要となるため、開発は取り消しとなった。

平成15年12月、崇教真光が教会施設の建設を計画したため、甲府市教育委員会との間で埋蔵文化財をできうる限り保存しながら建設をするよう協議を重ねた。その結果、教会施設および駐車場は盛土の範囲内で工事を行い、上下水道等が付設される道路拡張部分のみ発掘調査を実施し、地下に包蔵される埋蔵文化財を記録保存することで調整・了解されるに至った。

平成16年２月、埋蔵文化財発掘の届出（57条の２）を受理し、６月14日発掘調査に着手した。

第２節　調査方法

発掘調査は東西約35ｍ、南北の最大幅約２ｍの三角形をした狭小な調査区域を対象とした。

調査地点は、平成７年の試掘調査をもとに、地表から約60cm堆積する表土を重機で除去した。表土除去後の掘り下げや遺構検出は人力で行った。土層堆積状況図・平面図・遺物出土状況図を適宜作成し、同時に記録写真を35mm一眼レフカメラで撮影した。

第２章　地理的環境と歴史的環境

第１節　地理的環境

大坪遺跡が所在する甲府市桜井町は市東端に位置し笛吹市石和町と隣接する。桜井町を含む甲運地区（横根町・桜井町・川田町・和戸町）は甲府盆地の北縁部に位置し、秩父山塊に連なる大蔵経寺山・八人山を北に臨み、八人山に源を発する十郎川により形成された扇状地に立地する。十郎川は大坪遺跡が立地する扇状地を形成した後、濁川・平等川と合流し笛吹川に交わり、笛吹川はやがて富士川と名前を変え太平洋に注ぐ。

甲運地区は青梅街道（現国道140号線「雁坂道」）や甲州街道（現国道411号線）に沿い、交通・運輸の要衝となっていたことから「甲運」の名を冠している。また笛吹川（富士川）の支流である平等川が調査地の東側約1.2kmを流れ、これも富士川舟運の一環として利用されていたことが想定される。

第２節　歴史的環境

大坪遺跡が立地する甲府盆地北縁部は、古墳時代初頭から近世までの遺跡が数多く所在

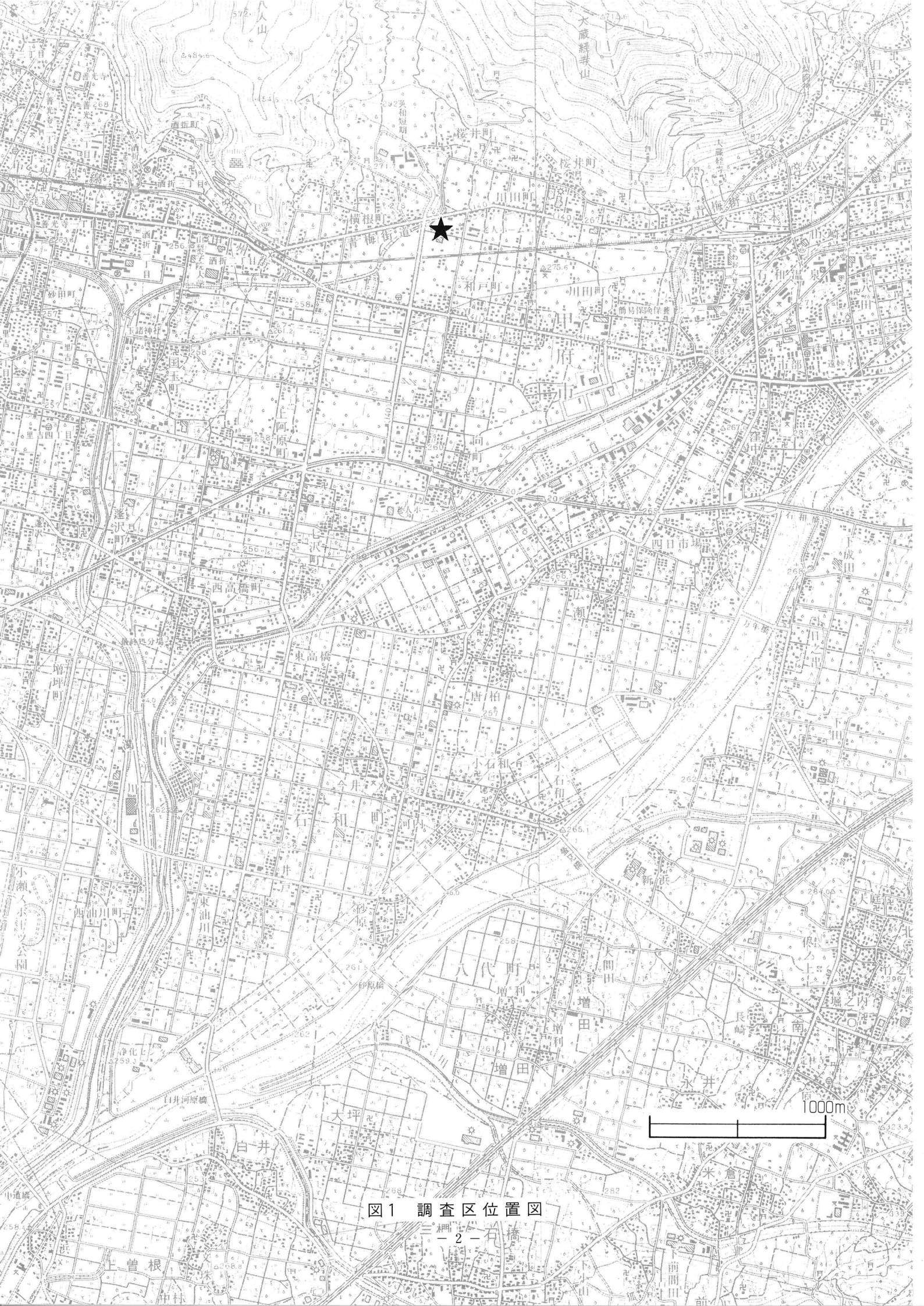


図1　調査区位置図

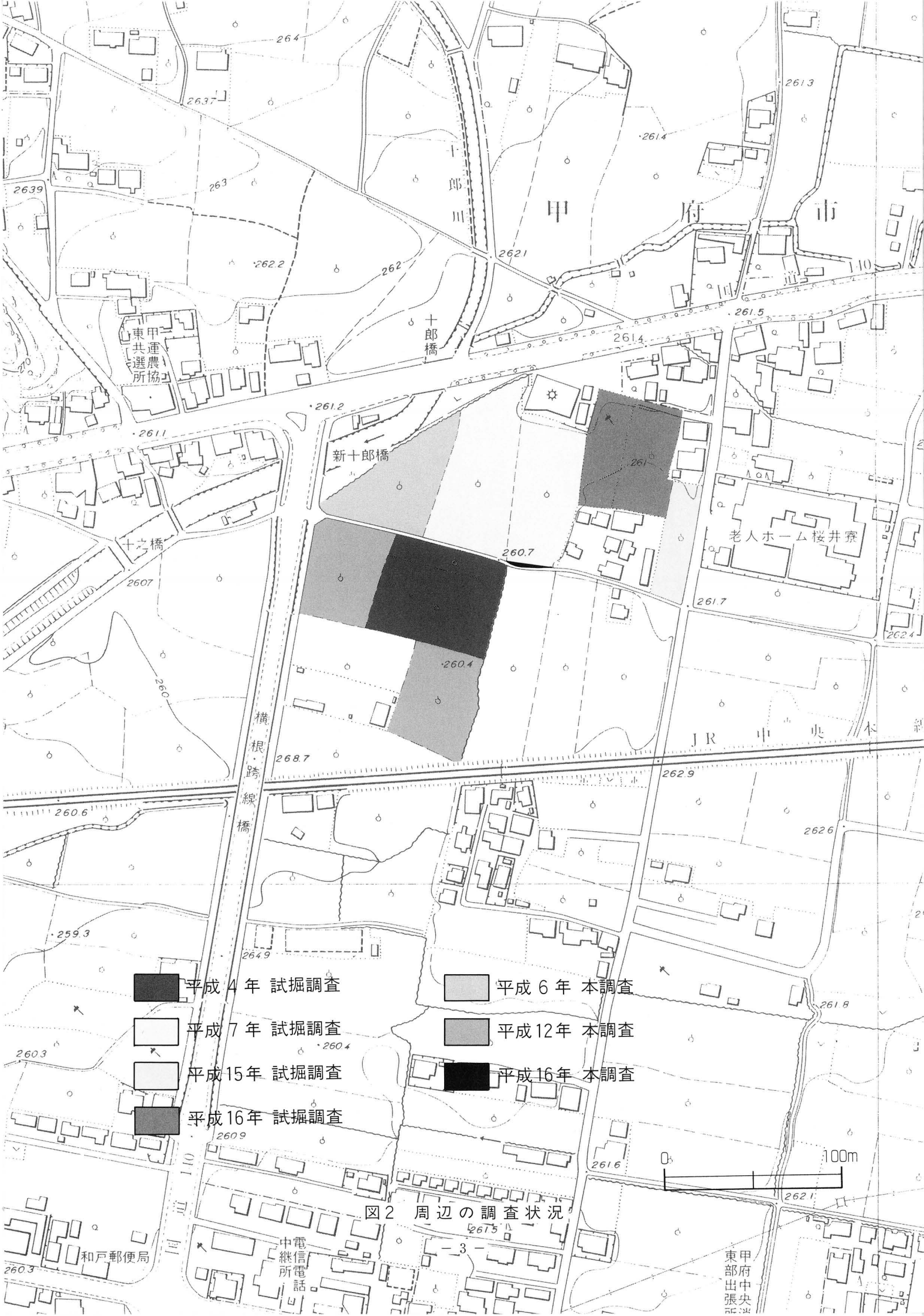

甲府市
十郎川
十郎橋
新十郎橋
十之橋
横根・跨線橋
JR中央本線
老人ホーム桜井寮
甲運農協
東共選所
和戸郵便局
中継所
電信電話
甲府中央出張所
平成4年 試掘調査
平成7年 試掘調査
平成15年 試掘調査
平成16年 試掘調査
平成6年 本調査
平成12年 本調査
平成16年 本調査
0
100m

図2 周辺の調査状況

し、平安時代に編さんされた『倭名類聚抄』に記載される表門郷に推定される地域である。調査地点から約１㎞東南東には桜井畑遺跡があり、古墳時代前期の方形周溝墓群が検出され、１辺28ｍの規模を有するものも確認されている。また古代の集落跡も検出され、なかには村落内寺院とも思われる掘立柱建物跡も検出されている。

調査地の北にある八人山から大蔵経寺山には、主体部のみならず墳丘すべて礫石だけで築かれた積石塚古墳群が分布する。６世紀から７世紀にかけて築造されたと考えられ、横根桜井積石塚古墳群（甲府市）に145基、大蔵経寺山古墳群（笛吹市石和町）に19基、春日居古墳群（笛吹市春日居町）に14基が確認されているが、周囲は葡萄畑に開墾され、上記のもの以外にも破壊されてしまった古墳が数多くあったと推定される。

大坪遺跡の北に隣接する東畑遺跡・久保田遺跡・道々芽木遺跡は、平成６年（1994）甲府市遺跡調査会により発掘調査された。古墳時代から平安時代にかけての集落跡が検出され、白鳳時代に制作された小金銅仏（山梨県指定文化財）が出土し注目を集めた。また、平成12年（2000）の調査では、蟬の装飾を持つ金銅製海老錠が出土している。

調査地点から約800ｍ東に所在する川田瓦窯跡は、７世紀後葉に操業し寺本廃寺（笛吹市春日居町）に瓦を供給した。また、500ｍ東に所在する上土器瓦窯跡は、８世紀から９世紀後葉にかけて操業し、国分寺・国分尼寺に瓦を供給したことが判明している。大坪遺跡の性格と併せ考えると、古代における表門郷域は大工業地帯を形成していたといえる。

中世の遺跡では、守護で武田信玄の曽祖父～父にあたる武田信昌～信虎の居館と想定される川田館が東方900ｍに所在する。昭和62年（1987）甲府市史編さん室による試掘調査では、15世紀から16世紀にかけての土師質土器や陶磁器が出土している。

第３節　大坪遺跡の調査・研究史

大坪遺跡の発見は昭和50年（1975）、国道140号線改良工事により多量の土器が発見されたことによる。国道140号線と旧国道20号線（現国道411号線）をつなぐ、国鉄（現JR）中央線の跨線橋（現「和戸通り」）新設工事の際、山梨県遺跡調査団が発掘調査を行った。このときの調査により土器集積遺構、溝跡が確認され、未焼成の土器群が検出された。このことから大坪遺跡が土器の生産遺跡だと考えられてきた。

昭和57年（1982）には十郎川の河川改修工事に伴い、旧河床地点、教習所地点で発掘調査が行われた。旧河床地点の発掘調査により、８世紀から10世紀にわたる土器と自然遺物が検出されている。なかでも「甲斐国山梨郡表門」と刻書された土器が発見されたことは、考古学のみならず歴史に興味ある人々の視線を集めた。この土器は９世紀末から10世紀初頭に比定される土師器皿で、記された内容が『倭名類聚抄』に記載される国・郡・郷の名称と一致し、文献資料と考古資料が一致した極めて貴重な例である。

平成４年（1992）に老人保険施設の建設に先立ち、大坪遺跡真光地点の西・南の区画（甲府市桜井町546、553-1、554、559-1、610番地）について試掘調査を実施している。その調査結果を受け、西側の区画（甲府市桜井町610番地）は甲府市遺跡調査会により平成６年に発掘調査が実施されている。また南側の区画（甲府市桜井町546、553-1、559-1番地）は、平成12年（2000）に大坪遺跡発掘調査会により調査が実施されている。上記２件の調査により、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡や土器製作工房跡が検出されている。また大量の土器や木製品とともに、奈良時代の役所的施設を連想させる銅製鋳帯巡方や、仏教施設を連想させる瓦塔、壺Ｇ類、鉄鉢型土器が出土している。

またこれ以外にも大坪遺跡の範囲内において、住宅建設や宅地造成に先立って、多くの箇所の試掘調査を実施している。

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　層序

調査区の西端及び中央付近において、深掘りを施し土層確認し図化した。

盛土される以前はほぼ平坦であったため、おおよそこの層序を基本土層と見なすことができる。これによると現地表下約40cmまでの１層・２層は平成７年実施の試掘調査のあと施された客土である。そのため、３層以下が旧来の標準土層である。各面の土層説明については図３の説明を参照されたい。

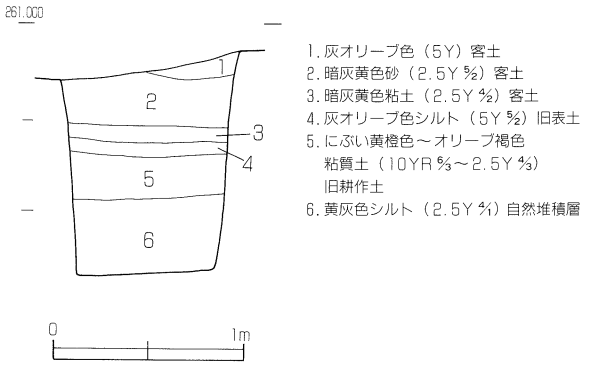


図３　調査区西壁セクション

第２節　遺構と遺物

ⅰ　試掘調査

試掘調査は、調査区（甲府市桜井町606及び610番地）に幅２ｍのトレンチを３箇所設定し、調査区全体について埋蔵文化財の残存状況確認に努めた。その際、確認できた遺構は敢えて掘り下げて調査をせずに、その存在のみを確認することとした。

調査の結果、古墳時代後期から平安時代にかけての土器や瓦とともに竪穴住居跡や溝跡等が多数確認できた。詳細は不明であるが、開発に際しては事前に発掘調査を実施し、埋蔵文化財を記録保存する必要があると判断した。

ⅱ　本調査

本調査は試掘調査を実施した区画のうち、西半分のさらに道路建設する部分について実施した。調査区の立地する場所が道路際であるため、調査区南側はほぼ全面にわたり石囲いの側溝の痕跡が確認できた。また、調査区の中央付近から西端にかけて、約２ｍ間隔で約２ｍ四方の攪乱が４箇所にわたり検出された。そのためもあり、遺構は全く検出できなかった。

出土遺物も調査区東側にかけてわずかに出土した程度である。

ⅲ　出土遺物

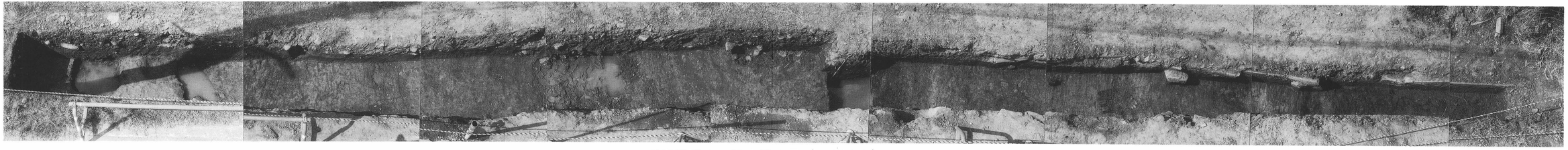
遺物はほぼ平安時代、それも９世紀代の所産と思われる甲斐型土器がほとんどを占め、ほかに須恵器、灰釉陶器、布目瓦、図示していないが用途不明な木製品が出土している。また江戸時代後期以降の所産の土器や瓦もある。

土師器（図５．１～54、56、図８．１～９）

種別には坏、高台坏、高坏、皿、蓋、小型甕がある。しかし、坏・皿が出土遺物のほとんどを占め、甕等の煮炊具の出土は極めて少なく、これまで指摘されてきたことと一致する。

坏（１～22）は、内面に暗文をもち体部下半に手持ちヘラケズリが施される。

皿（23～31）は、体部に明瞭な屈曲と稜をもつもの、体部内面に凹線をもつもの、体部から口縁部にかけて緩やかに湾曲するものがある。



写真図版１　調査区全景（モザイク）

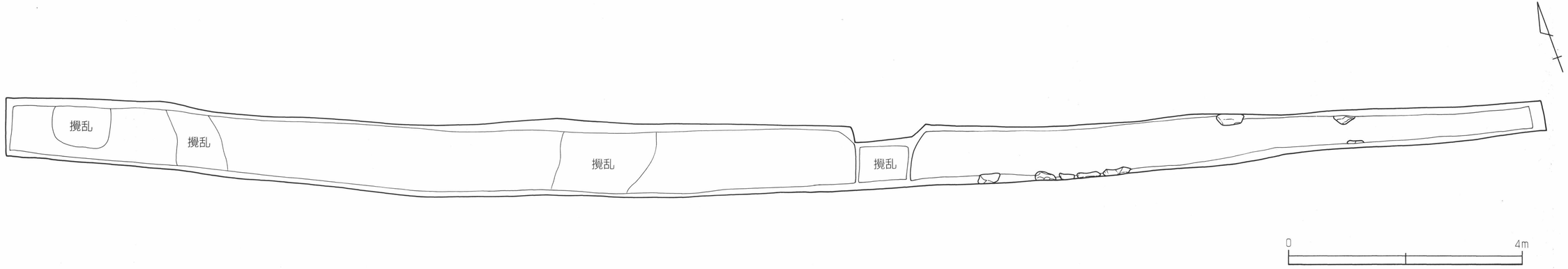


図４　調査区全体図

蓋（32～47）は、つまみ部が擬宝珠形を基調とするもののバリエーションが多い。端部のかえりがやや強いものと、非常に弱いものがある。

高台坏（48、49）は、削り出し高台をもつ。底部のみの出土で全体像は不明である。

高坏（56）は、脚部を八角に面取りし成形されたものがある。ただし脚部のみの出土で全体像は不明である。

小型甕は、甲斐型甕特有の石英、長石、雲母を含む粗い胎土のもの（52）と、精製された粘土によりロクロ整形されたもの（50、51）がある。

須恵器・陶器（図6.55、57～63）

須恵器には蓋（57）、甕（58～62）がある。57は端部のかえりがやや弱い蓋である。62は自然釉を被り、部分的に火脹れをもつ。55は、刷毛により施釉され灰釉陶器碗で高台の断面がやや三角形を呈する。部分的な磨耗が著しく、硯として二次転用された痕跡がある。

布目瓦（図7.64～69）

軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦（64）は赤褐色を呈し、複弁のおそらく八葉蓮華文。甲斐国分寺に用いられ、寺本廃寺にも補修用として用いられたことが想定されるものである。

近世以降の土器類（図8.11.12）

11は火鉢である。口唇部に五重の菱形を基調とする装飾が施される。12は軒桟瓦である。丸瓦部分に三つ巴文を持つ。

第4章　まとめ　―大坪遺跡における古代の地形について―

『遺跡地図』で記載される大坪遺跡の範囲は十郎川九之橋を中心に東西約700m、南北約500mとかなり広大な範囲である。大坪遺跡の調査のうち、過去実施された発掘調査（試掘調査を含む）のほとんどが十郎川の東側に集中している。

大坪遺跡の他地点の調査成果、及び平成7年の試掘調査結果から、今回の調査でも複数の住居跡とともに多量の出土遺物が検出されることを予想していた。しかし調査の結果、遺構は検出できず、また土器も数点出土しただけであった。この出土遺物および遺構もほとんど検出されなかったという結果を踏まえ、この地点の試掘調査を併せた周辺の発掘調査の結果から大坪遺跡周辺の土地利用の状況がややわかりかけてきたといえる。そこで今回調査した区画を中心に、古代における周囲の土地利用について以下の通り考察する。

今回調査の対象となった桜井町600-1、-2及び606番地においては、606番地（西半分）にかけて遺構が集中する傾向があり、600-1、-2番地（東半分）にかけて湧水し始めるとともに遺構が疎らとなる傾向が窺えた。

今回の調査対象地の西側区画となる桜井町610番地では、9世紀前半及び10世紀前半の2時期にピークをもって集落が営まれたことが想定されている。〔平野1996〕また、現在北方から流れてくる十郎川が、610番地のすぐ北で流れを変えて南西に流れている。調査区の北には延長する掘立柱建物跡が想定されているのに対し、西側は地形的にやや傾斜し遺構も続く様相がみてとれない。このことから、610番地のすぐ西側まで十郎川が流れていた時期があると想定できる。

昭和56年（1981）に「北地点」として調査された横根町338-1番地と544-1番地に挟まれた地点では、9世紀後半に属する遺物が出土している。遺物は焼土付近を中心に出土するが全体量としては少ない。後述する「南地点」より湿気が少ないことから、平地化が早く

進んだことが想定される。〔末木1976〕「南地点」では溝と土師器集積遺構が確認され、全域から土器等も出土している。また湧水が著しく粘性の強い黒褐色粘土が堆積する状況が報告されていることから、より旧河道に近い地点だったことが想定できる。

昭和57年（1982）に十郎川の河川改修工事に先立ち、「旧河床地点」として調査された横根町212番地では、奈良・平安時代の遺物が出土し、粘土と砂が互層に堆積することから旧河道だったことが報告されている。「教習所地点」では粘土層から平安時代の土器が出土している。〔信藤1984〕

さらに今回の対象地の南西区画である横根町553-1、559-1番地においては古墳時代の土器もみられるものの、9世紀後半から10世紀前半にかけて土器の出土が多い。竪穴住居は南東に偏って検出され、北側半分から南西にかけて土坑やピットが検出されている。〔櫛原2002〕

道路を挟み南側の区画である横根町554、556、561、562-2番地の区画は、平成4年(1994)に試掘調査が実施されている。古墳時代から平安時代にかけて土器が出土しているが、散漫な出土で量的にも少ない。〔伊藤2004〕さらに南の横根町546番地において、出土する土器は8世紀初頭のものが多いものの東半分は旧河道にあたる。現在のように平地化するのは中世以降と想定されている。〔櫛原前掲〕

平成16年に東隣の区画である桜井町592、596番地、さらに東側の区画にあたる桜井町586-1、590-1、591-1番地について平成15年（2003）に試掘調査を実施している。どちらも平安時代の遺物が出土するがその出土量も少なく散漫であった。また遺物包含層より下層は黒褐色の極めて粘性の強い粘土層が堆積し、沼沢地だったことが窺われた。

以上のことから、現在八人山の麓に端を発する十郎川は、現在桜井町610番地のすぐ北で流路を西に大きく変えているが、古代においては現在のＪＲ中央線のさらに南まで直進し、その先で進路を西に変え「旧河床地点」付近に流れていたことが想定できる。また流れはとても緩やかで周囲は湿地を形成していたと思われる。実際の流路としては、周囲の標高はほぼ260ｍであるが、若干低く260ｍに満たない場所が帯状に分布する地帯がある。そこが古代に十郎川の流れていた地域と推定される。

参考文献

末木健・菊島美夫・山崎金夫　1976　『大坪』山梨県遺跡調査団
信藤祐仁　1984　『大坪遺跡』甲府市教育委員会
平野修　1996　『大坪遺跡　発掘調査報告書Ⅲ』甲府市遺跡調査会
櫛原功一　2002　『大坪遺跡－平成12年度調査地点の報告－』大坪遺跡発掘調査会
伊藤正幸　2004　「大坪遺跡」『甲府市内遺跡Ⅰ』甲府市教育委員会
『山梨県史』資料編2　1999　山梨県

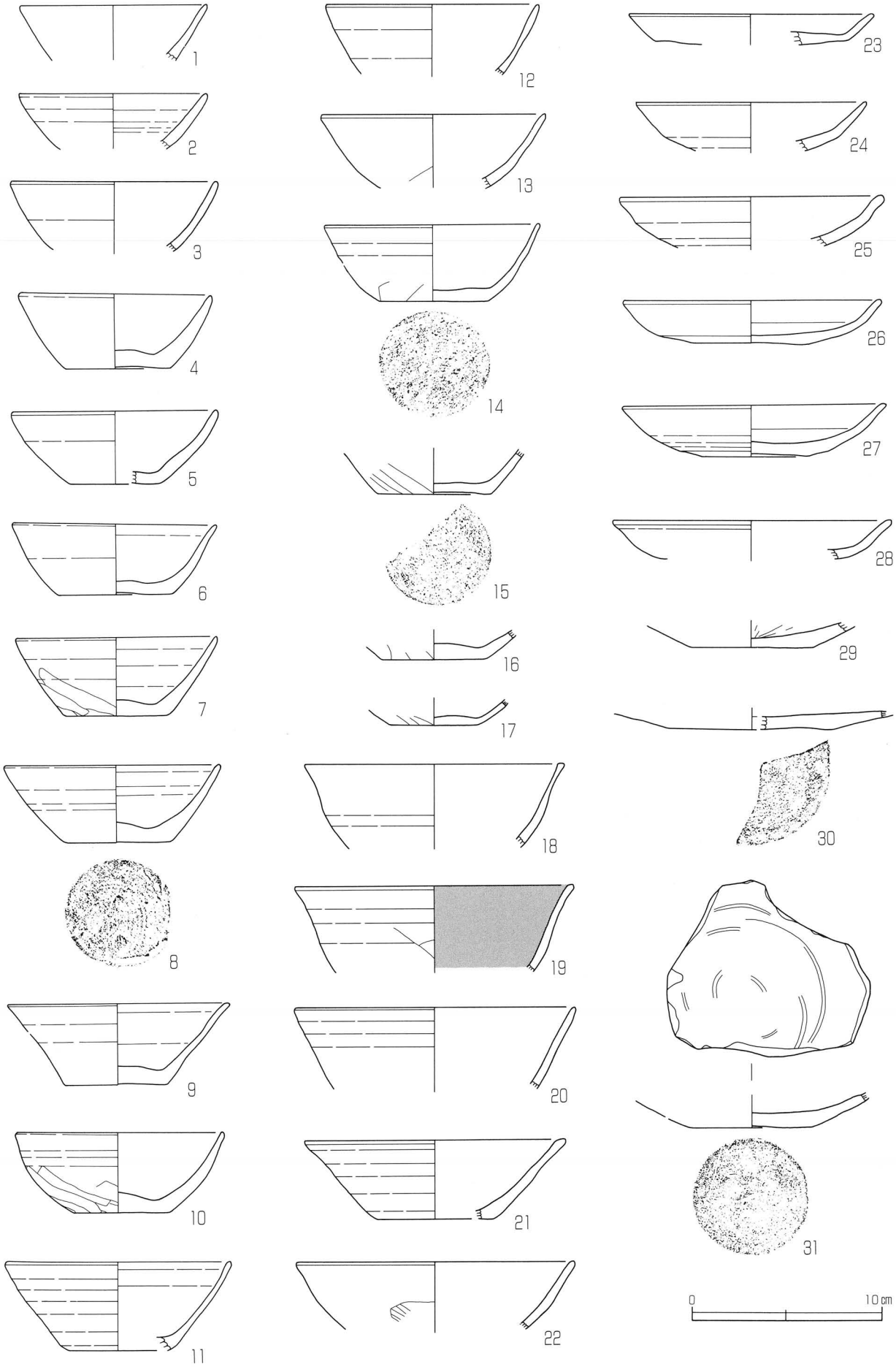

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
10cm

図5　出土遺物

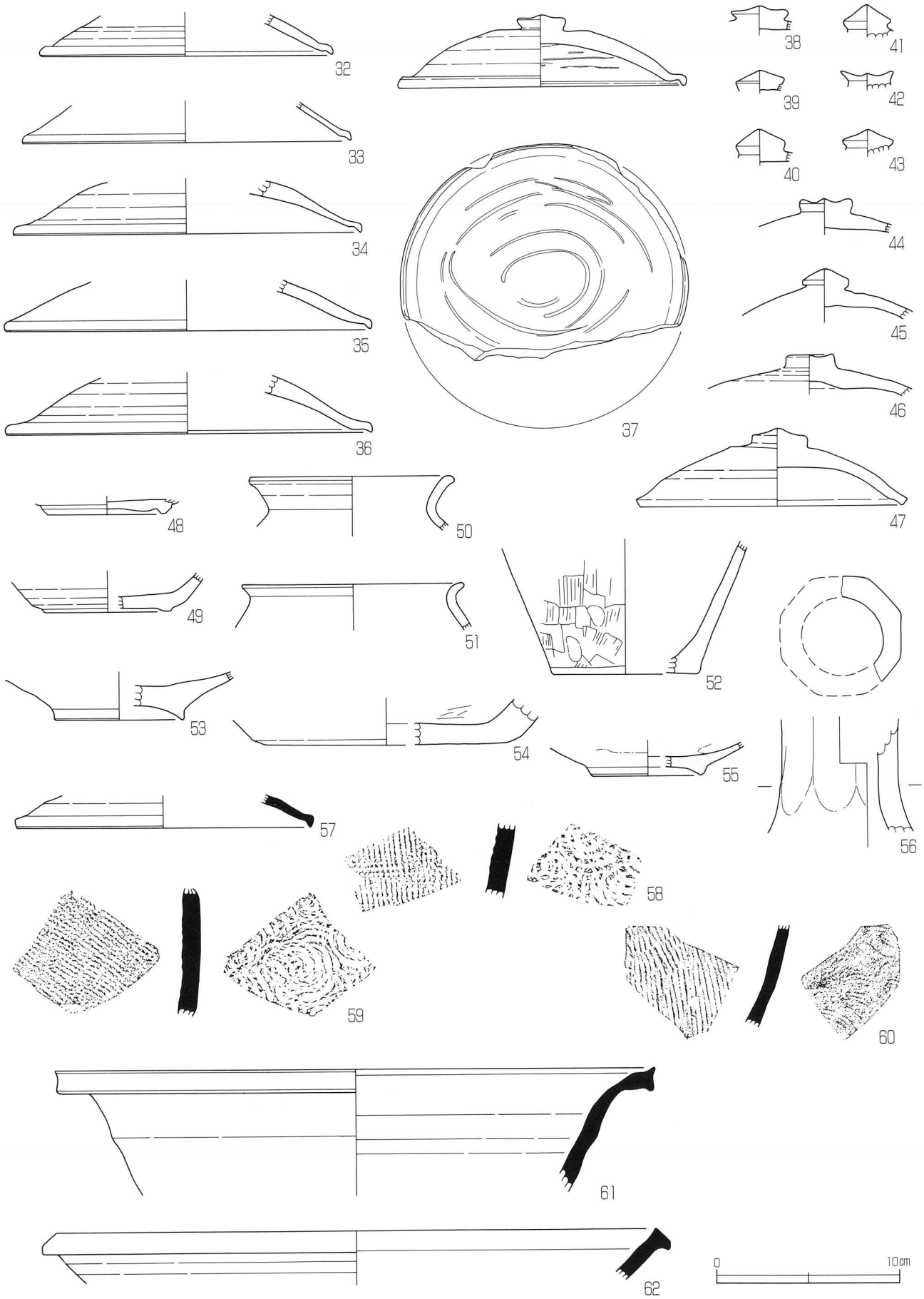

32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
0
10cm

図6　出土遺物

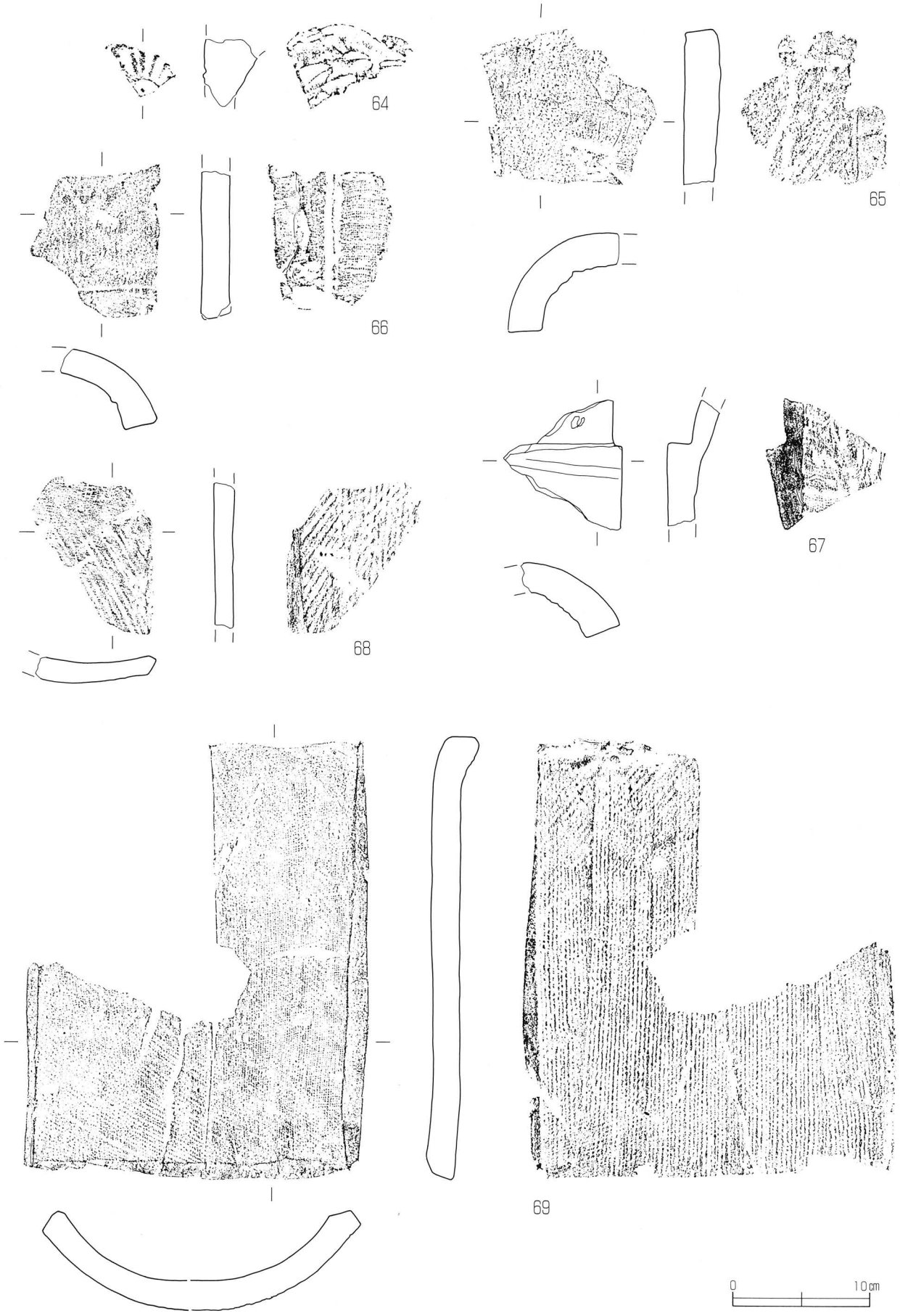


図7 出土遺物

表１　試掘調査出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量（cm） 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	坏	(9.8)・－・－	口縁部～体部	ナデ	長石・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
2	土器	坏	(10.0)・－・－	口縁部～底部	ナデ	長石・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
3	土器	坏	(11.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	7.5YR 橙 7/6	
4	土器	坏	10.1・4.0・5.5	口縁部～体部	ナデ 底部ヘラケズリ	長石・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
5	土器	坏	(10.8)・(3.95)・(4.8)	口縁部～底部	ナデ	密	良	7.5YR 橙 7/6	
6	土器	坏	10.7・3.8・6.0	口縁部～底部	ナデ	長石・石英・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
7	土器	坏	(10.6)・4.2・(5.3)	口縁部～底部	内面ナデ 外面ヘラケズリ	長石・赤色粒子	良	7.5YR にぶい橙 7/4	
8	土器	坏	(11.5)・4.1・5.7	口縁部～底部	ナデ　底部回転糸切り後ヘラケズリか	密	良	5YR 橙 6/6	
9	土器	坏	11.6・4.4・5.5	口縁部～底部	ナデ	長石・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
10	土器	坏	11.0・4.3・5.0	口縁部～底部	内面ナデ 外面ヘラケズリ	長石・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
11	土器	坏	(12.0)・(4.8)・(5.1)	口縁部～底部	ナデ	長石・赤色粒子	良	内)7.5YR 浅黄橙 8/4 外)5YR 橙 7/6	
12	土器	坏	(11.4)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	内)10YR 浅黄橙 8/3 外)7.5YR 浅黄橙 8/6	
13	土器	坏	(12.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
14	土器	坏	(11.4)・(5.25)・5.8	口縁部～底部	内面ナデ 外面ヘラケズリ	赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
15	土器	坏	－・－・6.0	底部	内面ナデ 外面ヘラケズリ	石英	良	7.5YR 浅黄橙 8/3	
16	土器	坏	－・－・5.6	底部	内面ナデ 外面・底部ヘラケズリ	長石・赤色粒子	良	内)5YR 橙 6/6 外)5YR 明赤褐 5/6	
17	土器	坏	－・－・4.8	底部	内面ナデ 外面ヘラケズリ	雲母・金雲母・赤色粒子	良	内)5YR 明赤褐 5/6 外)10YR にぶい黄橙 7/2	
18	土器	坏	(14.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
19	土器	坏	(15.0)・－・－	口縁部～体部	内面ナデ 外面ヘラケズリ	赤色粒子	良	内)10YR 黒褐 3/1 外)10YR 灰白 8/2	
20	土器	坏	(15.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
21	土器	坏	(14.0)・(4.3)・(6.2)	口縁部～底部	ナデ	赤色粒子	良	10YR にぶい黄橙 7/2	
22	土器	坏	(15.0)・－・－	口縁部～体部	内面ナデ 外面ヘラケズリ	赤色粒子	良	7.5YR にぶい橙 6/4	
23	土器	皿	(13.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
24	土器	皿	(12.4)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	内)10YR にぶい黄橙 7/3 外)7.5YR にぶい橙 7/4	
25	土器	皿	(14.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	内)10YR 褐灰 4/1 外)7.5YR 橙 6/6	
26	土器	皿	13.6・2.3・5.8	口縁部～底部	ナデ	石英・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
27	土器	皿	13.8・2.8・5.5	口縁部～底部	ナデ 底部ヘラケズリ	長石・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
28	土器	皿	(15.0)・－・－	口縁部～底部	ナデ	赤色粒子	良	内)10YR 明黄褐 7/4 外)7.5YR 橙 6/6	
29	土器	皿	－・－・(6.6)	底部	内面放射状暗文 底部ヘラケズリ	金雲母・赤色粒子	良	内)10YR にぶい黄橙 7/4 外)7.5YR 橙 6/6	
30	土器	皿	－・－・(8.6)	底部	ナデ 底部ヘラケズリ	赤色粒子	良	内)5YR 橙 6/6 外)7.5YR 浅黄橙 8/4	
31	土器	皿	－・－・6.4	底部	ナデ 内面渦巻状暗文	長石	良	10YR にぶい黄橙 7/2	
32	土器	蓋	(16.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	内)10YR にぶい黄橙 7/4 外)7.5YR にぶい橙 7/4	
33	土器	蓋	(18.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	7.5YR 橙 6/4	
34	土器	蓋	(19.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	内)10YR 浅黄橙 8/3 外)7.5YR 浅黄橙 8/4	
35	土器	蓋	(20.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	内)7.5YR 浅黄橙 8/4 外)7.5YR 橙 7/6	

表２　試掘調査出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
36	土器	蓋	(20.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	7.5YR 橙 7/6	
37	土器	蓋	15.7・4.0・つまみ 2.6	つまみ～口縁部	ナデ 内面渦巻状暗文	長石・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
38	土器	蓋	－・－・－	つまみ	ナデ	赤色粒子	良	7.5YR にぶい橙 7/4	
39	土器	蓋	－・－・－	つまみ	ナデ	赤色粒子	良	10YR 浅黄橙 8/3	
40	土器	蓋	－・－・－	つまみ	ナデ	密	良	10YR 褐灰 5/1	
41	土器	蓋	－・－・－	つまみ	ナデ	密	良	10YR 明黄褐 7/6	
42	土器	蓋	－・－・－	つまみ	ナデ	密	良	10YR 明黄褐 7/6	
43	土器	蓋	－・－・－	つまみ	ナデ	密	良	7.5YR 浅黄橙 8/3	
44	土器	蓋	－・－・－	つまみ	ナデ	密	良	10YR にぶい黄橙 7/2	
45	土器	蓋	－・－・－	つまみ	ナデ	密	良	内)7.5YR 灰白 8/2 外)7.5YR 浅黄橙 8/4	
46	土器	蓋	－・－・－	つまみ～体部	内面ナデ 外面ヘラケズリ	長石・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
47	土器	蓋	14.4・4.3・－	つまみ～口縁部	内面ナデ 外面ヘラケズリか	長石・石英・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
48	土器	高台付坏	－・－・6.6	底部	ロクロナデ 削り出し高台	金雲母・赤色粒子	良	内)10YR 浅黄橙 8/3 外)7.5YR 橙 7/6	
49	土器	高台付坏	－・－・(7.0)	体部～底部	ロクロナデ 削り出し高台	長石・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
50	土器	小型甕	(11.0)・－・－	口縁部～頸部	内外面ナデ	赤色粒子	良	7.5YR にぶい橙 7/4	
51	土器	小型甕	(12.0)・－・－	口縁部～頸部	内外面ナデ	赤色粒子	良	10YR 灰白 8/1	
52	土器	甕	－・－・(8.0)	底部	内面ナデ 外面ハケ・指頭痕	長石・石英・雲母・金雲母	良	内)5YR 明赤褐 5/6 外)7.5YR 黒褐 3/2	
53	土器	脚高高台坏	－・－・(7.0)	底部	内外面ナデ	赤色粒子	良	内)10YR 黄橙 8/6 外)7.5YR 橙 6/6	
54	土器	甕	－・－・(13.7)	底部	内面ナデ 外面・底部ヘラケズリ	密	良	内)7.5YR 明褐灰 7/1 外)10YR 浅黄橙 8/3	
55	陶器	碗	－・－・(6.0)	底部	灰釉	雲母	良	－	転用硯
56	土器	高坏	－・－・－	脚部	内面ナデ 外面ケズリ	密	良	10YR 灰白 8/2	
57	須恵器	蓋	(16.0)・－・－	口縁部	内外面ナデ	密	良	N 灰 6/	
58	須恵器	甕	－・－・－	胴部	内面青海波文 外面叩き	密	良	N 灰 6/	
59	須恵器	甕	－・－・－	胴部	内面青海波文 外面叩き	密	良	N 灰 6/	
60	須恵器	甕	－・－・－	不明	外面叩き	密	良	5Y 灰白 7/1	
61	須恵器	甕	(33.0)・－・－	口縁部～体部	－	密	良	N 灰 5/	
62	須恵器	甕	(33.0)・－・－	口縁部	－	密	良	N 灰白 7/	
63	陶器	鉢	－・－・－	口縁部	施釉	密	良	－	
64	瓦	軒丸瓦	－・－・－	－	－	長石・赤色粒子	良	5YR 橙 6/6	
65	瓦	丸瓦	厚さ 2.5・－・－	－	表面ナデ 裏面布目か	長石	良	2.5Y 黄灰 4/1	
66	瓦	丸瓦	厚さ 2.1・－・－	－	表面縄目 裏面布目	長石	良	2.5Y 灰黄 7/2	
67	瓦	丸瓦	厚さ 2.3・－・－	－	表面ケズリ・ナデ 裏面布目	長石	良	5Y 灰 4/1	
68	瓦	平瓦	厚さ 1.4・－・－	－	表面布目・叩目 裏面縄目	長石・赤色粒子	良	2.5Y 黄灰 6/1	
69	瓦	平瓦	－・－・－	－	表面布目 裏面縄目	長石	良	10Y 灰 4/1	歪みあり

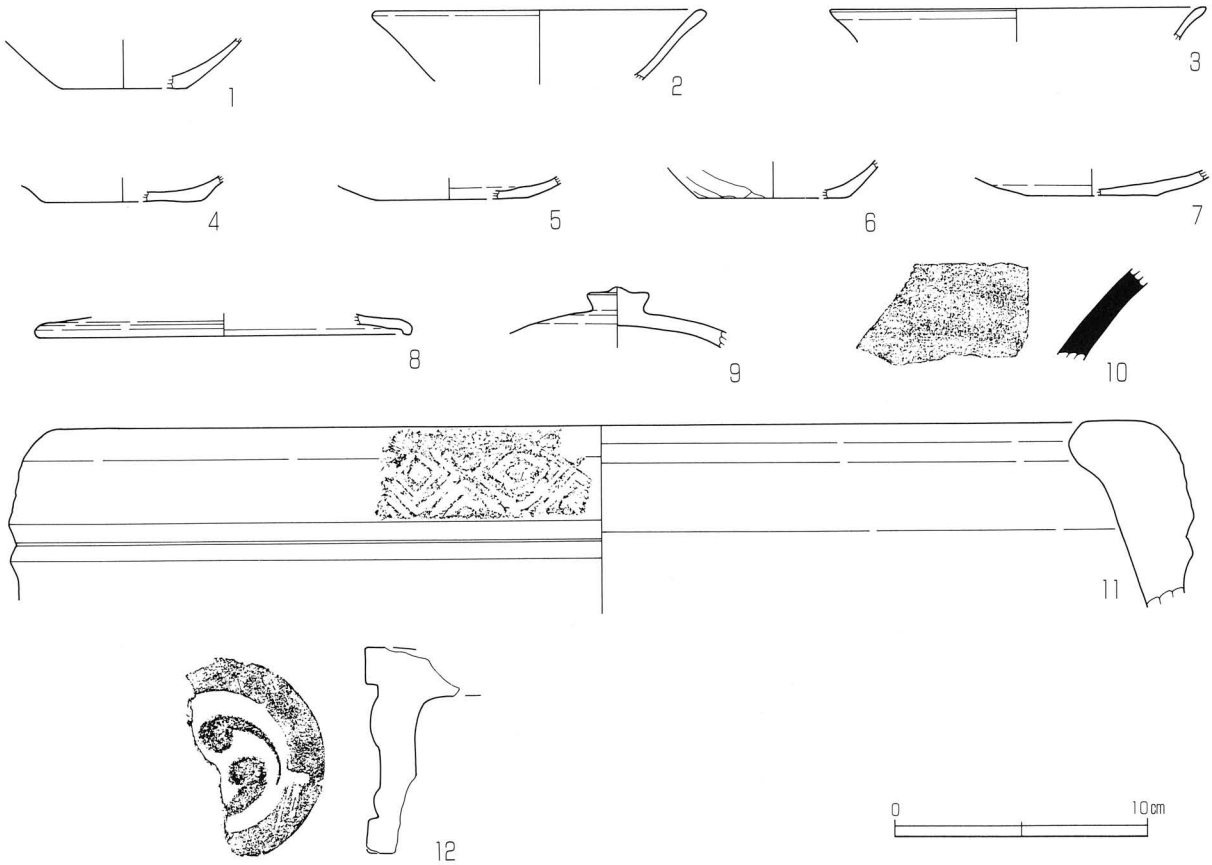
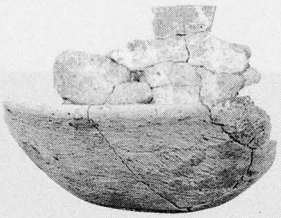


図8　出土遺物

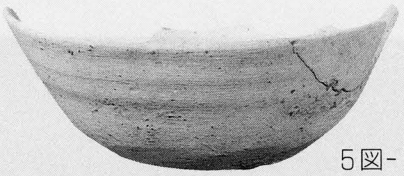
表3　本調査出土遺物

番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	坏	―・―・(5.0)	体部～底部	ナデ	赤色粒子	良	2.5Y 明黄褐 7/6	
2	土器	坏	(13.0)・―・―	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	7.5YR 明褐 5/6	
3	土器	坏	(14.5)・―・―	口縁部～体部	ナデ	赤色粒子	良	5YR 橙 7/6	
4	土器	坏	―・―・(6.3)	体部～底部	ナデ	長石・赤色粒子	良	5YR 明赤褐 5/6	
5	土器	皿	―・―・(5.0)	体部～底部	内面ナデ 外面ヘラケズリ	長石・赤色粒子	良	2.5Y 浅黄 7/4	
6	土器	皿	―・―・(6.0)	体部～底部	ヘラケズリ	長石・赤色粒子	良	10YR 浅黄橙 8/3	
7	土器	坏	―・―・(6.0)	体部～底部	内面ナデ 外面ヘラケズリ	長石・赤色粒子	良	2.5Y 灰白 8/2	
8	土器	蓋	(14.6)・―・―	口縁部～体部	ロクロナデ	赤色粒子	良	2.5Y 淡黄 8/3	
9	土器	蓋	―・―・―	つまみ～体部	内面ナデ 外面ヘラケズリ	長石・赤色粒子	良	10YR 明黄褐 6/6	
10	陶器	壺	―・―・―	頸部	不明	長石	良	胎土)2.5Y 灰白 7/1 外)N 灰 4/	
11	土器	火鉢	(38.0)・―・―	口縁部～胴部	内面ナデ	長石・石英・赤色粒子	良	7.5YR 褐 4/6	
12	瓦	軒桟瓦	厚さ 1.8・―・―	―	―	長石・黒色粒子	良	胎土)10YR 灰白 7/1 外)N 灰白 4/	

写真図版2　航 空 写 真



5図-4

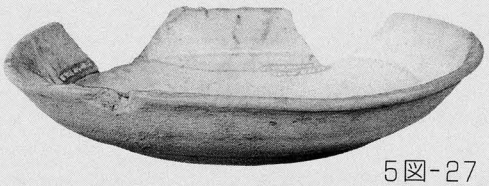


5図-14

5図-6

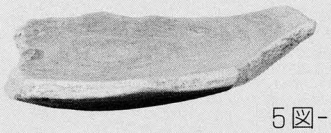
5図-26

5図-7



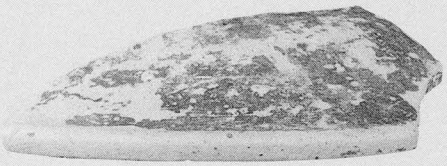
5図-27

5図-8



5図-31

5図-9

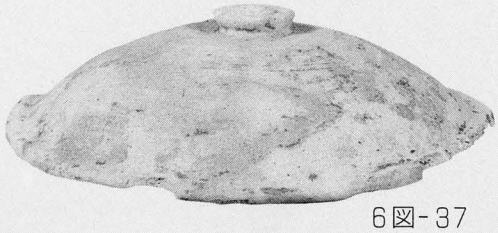


6図-34

5図-10

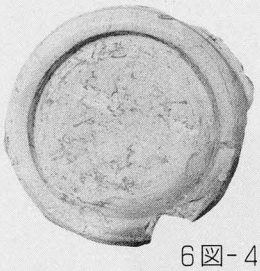
6図-36

写真図版３　試掘調査出土遺物 ①



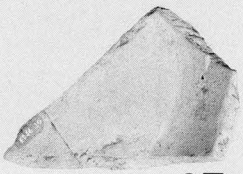
6図-37

6図-47

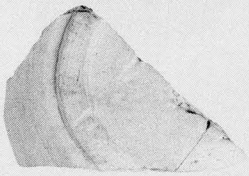


6図-48A

6図-48B

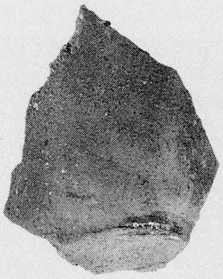


6図-49A



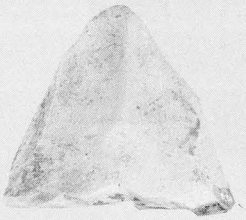
6図-49B

6図-50

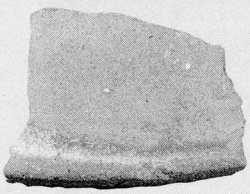


6図-52

6図-51

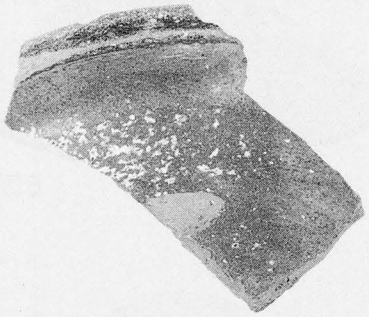


6図-56



6図-57

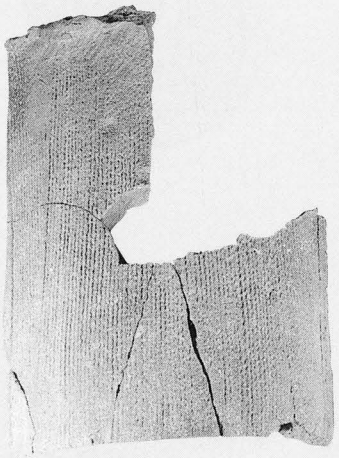
写真図版４　試掘調査出土遺物 ②



6図-61

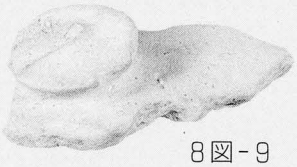
7図-64

7図-67



7図-69

本 調 査 出 土 遺 物



8図-9

8図-11

8図-12

写真図版５　試掘調査・本調査出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおつぼいせき
書名	大坪遺跡
副書名	崇教真光山梨中修験道場建設に伴う発掘調査
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	28
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内１丁目18-1　電話 055(223)7324
発行年月日	平成16年12月20日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
おおつぼいせき 大坪遺跡	やまなしけん 山梨県 こうふし 甲府市 さくらいちょう 桜井町 600-1	19201	149	35° 39′ 27″	138° 36′ 57″	平成16年 (2004) 6月14日 ～ 6月18日 35m²	宗教施設建設

甲府市文化財調査報告28

大坪遺跡（おおつぼいせき）

— 崇教真光山梨中修験道場建設に伴う発掘調査報告書 —

平成16年12月15日　印刷
平成16年12月20日　発行

編　集　甲府市教育委員会
〒400-8585 山梨県甲府市丸の内１丁目18番１号
TEL ０５５（２２３）７３２４
FAX ０５５（２２６）４８８９

発　行　甲府市教育委員会
崇教　真光

印　刷　㈱内田印刷所
〒400-0032 山梨県甲府市中央２丁目10-18